

## 平成28年度研修旅行 美しい自然と建築の息づく町 富山・高岡探訪 最新の現代建築から富山の歴史に根差した 伝統建築等、多様な建築を堪能

信州名匠会 平成28年度研修旅行は、10月22日・23日に25名が参加して行われ、富山・高岡を巡った。本年の旅行は、「北陸の美味しいものをいただきながら建築を満喫しよう」と降幡廣信先生にご協力・参加いただき、思い出深い研修旅行になった。

初日午前中、旧知事公舎を生かして計画された、シーラカンズアンドアソシエイツ ナゴヤ 伊藤恭行氏設計の「高志の国文学館」を、同館の川淵貴氏(富山県生活環境文化部)の案内で見学。その後、隈研吾氏設計の木材を積み上げた不思議な空間「カフェ・クレオン」で昼食。午後一番、これも隈氏の設計した「富山市ガラス美術館「キラリ」」を見学し、その後、「富岩水上ライン」で、「富岩運河環水公園」から国指定重要文化財「中島閘門」を体験して、「岩瀬」まで、水上クルーズを楽しんだ。

1日目の締めは、北前船廻船問屋「森家」と趣ある「岩瀬」の町歩きをした後、降幡先生が再生された磯料理旅館「松月」で富山湾の海の幸を堪能。宴席の後、降幡先生に建物再生についての特徴や思いを語っていただき、お

かみさんと共に館内の隅々までご案内いただいた。亡くなられた御主人の思いを具現化し、見事に再生され、永きに渡り大変大事に使われているすばらしい空間を体感し、参加者一同感激のひと時を過ごした。



「岩瀬」の磯料理旅館「松月」降幡先生のお話を聞く

### 土地の歴史を読み取り、現代の感性溢れる「高志の国文学館」

1日目の午後に水上クルーズをした。海まで続く長さ5.1kmの「富岩運河」を掘った土砂で、明治時代まで屈折していた神通川の廃川地が埋め立てられ、現在の市街地が生まれた。この埋立地に建てられていた旧知事公舎を改修し、新たに展示棟を増築することで万葉の時代から続く越中文学の文学館として再生されたのが、「高志の国文学館」である。

敷地全体を、松川から連続するランドスケープとしてデザインされ、知事公舎が屋敷、研修棟・常設・企画展示室棟が付随する蔵のイメージで分節配置され、周辺のスケールに溶け込み付んでいる。知事公舎とL字で万葉の庭を囲い込むライブラリーはキャンティレバーの大きな庇で構成され、3m×21mの大開口で、すばらしい庭園の眺めと、木々に囲まれた外部空間とのダイナミックで調和のとれた中間領域を創り出している。

この空間は「通り土間」のイメージで展示ゾーンに入場しない地域の住民も気軽に立ち寄って、ゆっくり過ごせる場となっている。

葉っぱをデザインしたアルミ鋳物パネルや、杉の圧縮材の床や家具、機械搬入口の巨大開口等、さまざまなディティールの工夫が、研ぎ澄まされた気品ある心地よい建築を成している。



「高志の国文学館」南面アプローチ



万葉の庭に面したキャンティレバーの大庇

## 研修旅行スナップ

2日目は、射水市新湊博物館・道の駅カモンパーク新湊。共に内井昭蔵氏の設計で、有機的な形態で地域の風土に根づく建築を見学。耐候性の強いセメント系の左官材料に庄川産の紅石を特殊なガンで吹き付ける等、職人の手仕事に支えられた魅力ある建物であった。

高岡金屋町、千本格子の町並み、江戸末期より続く葉種商の館 金岡邸といった、伝統建築も細かな説明を受けながら見学。昼食も海の幸を十分にいただき、「新湊きつときと市場」で海産物等、思い思いのお土産を買って帰路に着いた。



隈研吾氏設計の「カフェ・クレオン」にて



水上クルーズ「中島開門」を体験



内井昭蔵氏設計の「射水市新湊博物館」にて



葉種商の館「金岡邸」の堂々とした玄関

### 研修旅行日程

10月22日(土) 山二ハウジング駐車場－上信越道・北陸道－高志の国文学館－昼食カフェ・クレオン－TOYAMAキラリー－富岩水上ライン－富山環水公園－岩瀬カナル会館－回船問屋・森家、岩瀬の町並み－磯料理 松月－ホテル(泊)

10月23日(日) ホテル－射水市新湊博物館・道の駅カモンパーク新湊－高岡・金屋町－海鮮問屋柿の匠－新湊きつときと市場－新湊大橋－金岡邸－山二ハウジング駐車場

### 平成28年度研修旅行「美しい自然と建築の息づく町 富山・高岡探訪」参加者名簿

(25名。氏名・所属。順不同、敬称略)

五明京子・原田美也子・(株)五明、堀誠・夫人・建築工房アカシア、坂田守夫・坂田工業(株)、鎌倉良収・(株)鎌倉木材、小坂浩一・小坂建設(株)、笠原祐晃・(株)二見屋、大内健太郎・サンコー特機(株)、犬飼栄治・(株)シナノ大理石、黒澤忠・クロサワメタル(株)、高木茂実・松田・南信(株)、増田幸雄・匠建設(株)、祢津吉道・(株)ミツルヤ製作所、堀悟・(株)角藤、竹内公夫・(株)ピホームホームクリエイイト、降幡廣信・榊原信吾・(株)降幡建築設計事務所、山本耕平・長野サウナ販売(株)、米田満・(株)山二、倉橋美有希・(株)倉橋英太郎建築設計事務所、宮本夏樹・西澤広智・(株)宮本忠長建築設計、江口大輝・中村研哉・事務局

### 会員の動向 (平成29年1月～平成29年5月。順不同、敬称略)

- 入会 個人会員 笠原 晃祐/榊二見屋/屋根/長野市稲田牧190/026-228-6651  
高梨 友秀/榊高梨建設/大工/長野市三輪2丁目30-22/026-241-3605
- 会員名変更 (前→新) 賛助会員 (株)トライオン 大庭 修→松岡 幹生
- 退会 個人会員 山口真一郎/榊サンワ/内装  
高梨 廣男/榊高梨建設/大工

建築に携わる業種の異なる職人が集まり、交流を深めながら、信州の建築文化を後世に伝えようと活動する信州名匠会は今年、創立 25 周年を迎えた。ものづくりの精神でつながる職人の団体が今後、何をを目指すのか。会長の土本俊和氏と副会長の降幡廣信氏に考えを聞いた。

創立 25 周年  
インタビュー

## 1 信州独自の建築文化を次世代につなぐ 会員の力あわせ伝統の良さ訴える建物を

土本俊和氏（信州名匠会 会長、信州大学工学部建築学科 教授）



こうした独自性の強い会が長年継続されているのは、信州という地域性に由来しているように思う。くしくも宮本忠長先生は生前、「信州は日本のチベットだ」と表現されていた。いま、それがよく分かる。地形や気候、豊かな森林・植生など、われわれには中央とはまったく異なる環境が与えられている。これまでも、その中で独自の文化が育まれてきた。建築も同じで、360 度囲まれた山々に連なるような形状の屋根を持つ、景観を強く意識した建物がまち並みを形成している。こうした信州独自の建築文化を次世代につないでいきたい。

古い建物や文化を守ることは、職人を守ることにもつながる。ただ、宮本先生がおっしゃっていた「建築は現場で職人とともにつくるもの」という文化は残念だが確実に衰退している。経済最優先の枠組みの中で決まるルール（法制度）に縛られて仕事をしなければならないことは、職人にとっては厳しい環境だと思う。自分がやりたいことと違うことをやらなければ生き残れないという根源的なジレンマがある。

最近、長野県産の木材が都内の施設で全面的に使われている事例を見て驚いた。信州にいるわれわれが、地域材（県産材）のブランド力を見直し、きちんと認識することの必要性を強く感じた。地域材のブランド力の強化と普及が、信州の職人を活性化させる一つのヒントになるのではないかと考えている。

一方で、いま、若者の中で大工になりたい人や手仕事に興味を持つ人が増えている。教え子の中でも、そうした学生が増えており、「職人さんがやりがいを感じる設計書をつくりなさい」と指導している。木造を、こんなにこってりと教えているところもないだろう。職人の技術と文化を守る上で、設計者の責任は大きい。職人の仕事を守り、職人の気持ちが分かる設計者を育てたい。

将来的に信州名匠会として、何か形になる建物を、みんなの力をあわせてつくることできないだろうかと考えている。たとえば伝統的な工法や素材を用いて職人がつくりあげた小屋を展示して、たくさんの一般の人たちに見てもらいたいと思う。やはり目で見て生で感じると違う。そんな活動も想定しながら、先達の偉業を継承し、新たな歴史をつむいでいきたい。



宮本忠長建築設計事務所の会議室に飾られた、宮本氏の肖像画を前に。

創立25周年  
インタビュー

2

## 名匠会が生涯の目標を定めるきっかけに 跡を継いでほしい若者たちに、 夢や希望を語ろう

降幡廣信氏（信州名匠会 副会長、(株)降幡廣信建築設計事務所 会長）



信州名匠会で思い出深いのは、20年前の総会で、当時、明治村博物館の館長をされていた村松貞次郎先生と話をしたことです。私は68歳で、村松先生に「60歳で一線を退こうと考えていたのに8年も余分に過ごしてしまいました。70歳を節目に引退しようと思っています」と話したところ、村松先生は「君、それは勘違いだよ」とおっしゃった後、「(建築家の)村野藤吾は70歳までの仕事(作品)と71歳から亡くなる93歳までの仕事の数が同じ。70歳が(キャリアの)中間点だった。ぜひ、村野より長生きして、たくさんの古民家再生の仕事を残してほしい」と言葉をかけてくれた。その村松先生からの言葉を胸に、「村野先生が亡くなられた年齢を越える94歳まで仕事をしよう」という生涯の目標を定めた。その目標は、私にとって村松先生との「約束」。約束を果たそうと、88歳になったいまもこうして現役で仕事を続けている。

名匠会は職人のロータリークラブのような組織。職人は、その道についてはプロだが、ほかの業種のことは意外と知らない。私もそうだが、名匠会の仲間(会員)の職人が、どういう思いで、どういう仕事をしているかという話を聞くのは、非常に良い刺激になる。これまでに、この組織にふさわしいと思う高い技術と見

識を持つ良い職人に入会を勧めてきた。みんな今も熱心に会の活動に参加してくれている。これからも、そんな強い思いやこだわりを持って仕事をしている職人に入ってほしい。

名匠会の在り方として理想的なのは、同じ業種の職人のかたまりがあって、そのかたまりが集まって全体を構成するような形。後継者の問題を考えたときに、職人の世界では、同じ悩みを抱える同じ仕事の仲間と相談できるということが非常に大事になってくる。たとえば跡を継いでほしい息子に直接言えないことを仲間から伝えてもらったり、互いの職場を後継者の修業先として融通し合ったりと、実はそういった現実的な仕組みが人や技術の継承にとって、とても大切なことなんです。

それから後継問題で会員の職人に伝えたいのは、跡を継いでほしい人に苦勞話や愚痴ばかり語らないでほしいということ。これは基本的なこと、とても大切なことだと思っています。夢や希望、仕事のやりがい、喜びを語らなければ。私は最近、若い人たちに対して建築の仕事について、お客様に喜んでもらい、感謝までもらえて、さらにお金までもらえる素敵な仕事だと話しています。



本社の会議室（松本市）で「若者たちに夢と希望を語ろう」と話す、米寿を迎えた降幡氏。



# 定例研修会●Report

(平成28年12月～平成29年4月)

## 平成28年度 第4回研修会 信州名匠会リレートーク VOL.13 【鋼製建具：大型移動間仕切】

平成28年12月21日(水)

宮本忠長建築設計事務所

プレゼンター：(株)山二 米田 満氏

参加者：22名

### 流動性・拡張性・雰囲気づくりに活用

総合建築資材サプライヤーの山二(須崎市)の米田満氏を講師に迎え、鋼製建具の大型移動間仕切(スライドウォール)について聴いた。米田氏は大型移動間仕切のメリットとして、人数に応じて配置することで部屋の大きさを変えられる流動性、部屋数を増やすことによる稼働率の向上、空間ごとの音漏れ防止、冬は閉め夏は開けるといった季節に応じた利用などを列挙。「つかえ」として耐震性能を持つとし、京都国際会館に導入した事例では「阪神淡路大震災時に本体やレールに損傷が無かった」と話した。

移動間仕切導入のポイントについては「仕切る部屋の使い方を想定する」とし、実際に失敗した事例を挙げて「設計段階から入れることを想定しないと、後付けで入れようとした時に建築の精度が低く、収まらなかったり、スライドの動きが悪くなることもある」と注意点を話した。

匠ならではの技として米田氏は、旅館の宴会場に導入した際に床の間を造作し、パネルと壁の見分けを付かなくした事例を提示。隣の宴会の声をわざと漏れるようにして「会場の盛り上がりを感じられる雰囲気づくりに活用した」と紹介した。



大型移動間仕切について語る米田氏

## 平成28年度【新年会】

平成29年1月18日(水)

ホテル犀北館

参加者 30名

### 受け継ぎ、若い人々へ伝えていく

毎年恒例となった信州名匠会新年会が1月18日、犀北

館で行われ、会員同士が親睦を図り一年の抱負を語りあった。土本会長は年頭のあいさつで、「先人のなされたことを受け継ぎながら、若い人々にあらためて伝えていくことが重要。今年もよろしく願いいたします」と話した。

会の生みの親である宮本忠長名誉会長が、昨年逝去され、迎えた2017年。改めて会の意義を再認識し、故人の遺志を継承していくことを誓った新年会となった。



## 平成28年度 第5回研修会 信州名匠会リレートーク VOL.14 【左官工事】

平成29年2月22日(水)

宮本忠長建築設計事務所

プレゼンター：(株)宮内 宮内計臣氏

参加者：29名

### 塗り上げる仕事こそ左官

左官工事の宮内計臣氏は冒頭で、「左官は『塗り上げる職種』のこと。芸術家ではない」と話すと、飛鳥時代から連続と続き、伝統工法が確立した鎌倉末期や、庶民に広まった江戸時代、西洋建築を取り入れた明治・大正、クロス寄りになった高度経済成長期など、左官の歴史を技術とともに紹介。また自らが修復に携わった松代の寺町商家や善光寺の大勧進、作業を行った新宿歌舞伎町のゴジラなどの事例をスクリーンに映して説明した。

後半は「実のはりを入れられないほうが強い。でもりを入れると塗りやすくなる」など素材や技について解説。漆喰をつくる過程も実際に見せて紹介した。また、自身も「大好きだ」



職人魂を込めた仕事について、和気あいあいと語る宮内氏

という「こて絵」を紹介し、波ウサギや龍、唐獅子など、いずれも意匠に対応して火除けや厄除け、繁栄などの願いが込められていることを説明した。

途中、「こて絵には何かしら仕事をした左官のメッセージが込められている」と話した宮内氏が、修復の際にこて絵も直した事例などをスライドで見せると、参加者からは「やっぱり芸術家みたいだ」という声上がり、それに対し宮内氏が笑いながら「いや芸術家じゃないですよ。塗り上げる仕事をするのが左官なんですから」と冒頭の話に戻って繰り返し答える場面もあり、リレートークはなごやかに行われた。

## 平成28年度 第6回研修会 信州名匠会リレートーク VOL.15 【木製サッシ・木製家具工事】

平成29年3月29日(水)  
宮本忠長建築設計事務所  
プレゼンター：(株)山崎屋木工製作所 山崎慎一郎氏  
参加者：27名

### 性能の見える化が普及の鍵

今回のプレゼンターは、オーダー家具の製造から木製サッシ市場に参入した山崎屋木工製作所の山崎慎一郎氏。山崎氏が木製サッシ市場への参入を決めたのは、ドイツ・ハノーバーの展示会でドイツ製の木製サッシに出会ったことだという。ドイツで提唱されていた「持続可能性」をそこにを見た。東日本大震災により、エネルギー政策を再考する中で、住環境における木製サッシの役割の高さを知ったためだ。さらに、地域材を使うことで地域経済が回るモデルにも感銘を受けた。「自分が木でやりたかったのは、これかもしれない」。すぐさま本場から専用の加工機械を導入し、設計事務所とともに製品開発に取り掛かったという。

日本の市場については、「日本のサッシのうち木製は1%ほど。さらにそのうち6割が輸入製」と現状を紹介。「木製サッシ先進国のヨーロッパと比べ、日本は湿気が多い。材料や日差し、メンテナンスの方法などを考える必要がある」とし、日本に合った木製サッシのため、今も塗料などでの試験を重ねていると話した。

続いて「局所暖房の日本では、浴室のヒートショックによる死者が交通事故による死者数を上回る」とデータを取り上げると、窓にトリプルガラスを使い、サッシを木製にすれば家中全体を暖かくすることができ、ヒートショックを少な



持続可能性と快適な住まいをキーワードに木製サッシの可能性を追求する山崎氏。

くすることができる指摘。木製サッシの実物や、熱貫流率、気密性、水密性などの細かなデータを参加者に提示し、「性能の見える化が木製サッシ普及の鍵。子どもや孫の時代に環境が変わるように、木製サッシを広めていきたい」と話した。

後半の質疑では、コストや防火性能、サッシの塗料などが話題に。山崎氏は「トリプルを使った熱貫流率0.8w/m<sup>2</sup>/k 台のドレーキップ窓は、どうしても価格が高くなる」「むしろ断熱性能の高い木の部分より、ガラスのほうが溶けてだれる」「現在もさまざま試験中だが、今はドイツのプラネットカラーなどを多く使っている」など詳細に回答し、リレートークを締めくくった。

## 平成28年度 第7回研修会 【松代 新御殿・旧文武学校見学・お花見・陶芸教室】

平成29年4月15日(土)  
講師：(有)N設計 所長 西澤嘉雄氏  
参加者18名

4月の研修会は、毎年恒例となっている松代での花見を兼ねた見学会・親睦会を行った。まずは真田宝物館を訪れて見学会。真田丸の熱狂冷めやらぬ中での見学ということもあり、多くの来館者で賑わっていた。約5万点に及ぶ資料は見ごたえがあり、あっというまの2時間だった。

お昼は松代城の桜をバックにお花見弁当としたかったが、あいにくの雨により門の下で雨をしのぎながらのお弁当に。一風変わった空間での花見で、貴重な体験になった。



真田宝物館を見学する一行。

午後は、恒例となっている松代陶苑での松代焼体験を行った。今年で数回目という人も多く、手際よく粘土を各々の描く形へと変化させていく。すし用の皿、子どものお菓子皿、今年作品は一工夫、二工夫されているものが多く、焼き上がりが楽しみだ。



思いを形にしてゆく過程を楽しむ参加者。